

第 24 回

しょう りん す びょう ぶ  
松林図屏風

は せ が わ と う は く  
長谷川等伯

紙本墨画、六曲一双 各156.8×356cm  
16世紀(安土桃山時代) 東京国立博物館蔵(東京都)

※令和7年度版中学校教科書「美術2・3」P.36～37に掲載



出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)

### 何もない水墨画

日本の水墨画とは？と訊かれた時、まず見て欲しいと答えるのが、この松林図屏風だ。ただ松だけが描かれている。他には何もない。

けれども、松は絵の中でそれほど重要ではない。重要なのは、松を描くことによって形作られた『描かなかった』部分だ。

そこに、この絵の見どころがある。

描かれなかった部分は、霧であり、大気であり、空間であり、鑑賞者との地続きの『間』だ。それが絵の前に立つ人に、幻影を見せる。その幻

影は、長谷川等伯の精神の形であり、日本水墨画そのものだと思う。松でもなく、白紙そのものでもなく、描くことと描かないことが生み出す間、いわゆる『余白』が機能している。その完成がこの絵にはある。

水墨画には減筆<sup>げんびつ</sup>という考え方がある。少ない筆致で事物の本質を描くことなのだが、この絵はまさにそれだ。描かないことで、こんなにもリアルに描かれた絵は他にないだろう。

そして、しばらく佇んでみると、この絵の前で奇妙なことが起こっていることに気付く。鑑賞者の誰もが画面に近づかない。一定の距離を保

ち、絵の全体を眺められる位置まで離れる。誰かに教えられたわけでもない。だが、この絵との最高の距離感を、鑑賞者は自然と探してしまうのだ。最も大切なものは、間を通して現れる。

そうやって佇んだとき、今度は先に述べたような技術や仕組みではなく、長谷川等伯という一人の絵師の心が見える。とてつもなく切なく、素朴で、研ぎ澄まされた魂の形が見えてくるのだ。

それは絵に対する親しみに変わり、鑑賞者は自分の記憶と感覚を手練り寄せる。この景色を何処かで知って

いたような気さえする。見たことあるけれど、思い出せない……。その感覚はつまり、私たちが松林図の中を生き、等伯の精神の中で呼吸しているということなのだと思う。森羅万象そのものが等伯を通して描かせたというような絶妙な筆致も見えてくる。自然に人が手を加えられる限界値というものは、これくらい

なのかも知れない。そんな技と、心と、感覚的なものの完成が日本水墨画の至宝「松林図屏風」だ。結局、誰もがこの絵についての確に述べることはできない。本当にいいものとは、そんなものだと思う。何もない、に、何もかもを見るのだ。

1984年福岡県生まれ。水墨画家・小説家。2019年、水墨画を題材にした小説『線は、僕を描く』で第59回メフィスト賞を受賞しデビュー。2022年、同作を原作とした映画が全国東宝系にて公開される。2023年12月、『線は、僕を描く』の続編となる『一線の湖』を上梓。その他の著書に『7.5グラムの軌跡』がある。

砥上 裕将  
とがみ・ひろまさ